令和元年度　沖縄県立埋蔵文化財センター　企画展

移動展　与那国島の遺跡展

# トゥグル浜遺跡

2019 年 11. 15 (金) ▸ 11. 17 (日)

主催　沖縄県立埋蔵文化財センター　共催 DiDi 与那国交流館

# ごあいさつ

このたびは、DiDi 与那国交流館において移動展「与那国島の遺跡－トゥグル浜遺跡－」を開催する運びとなりました。

与那国島は琉球列島の最西端にあり、沖縄本島の那覇から約 520km、石垣島から約 127km、台湾までは約 125km の位置にあり、西洋上に台湾を望見することができます。

トゥグル浜遺跡は、祖納地区の西方、トゥグル浜と呼ばれる小さな砂浜に面した遺跡で、与那国空港の整備拡張工事計画に伴い、昭和 58（1983）年度に緊急発掘調査が行われました。その結果、与那国における初の石器時代の遺跡であることが確認され、局部磨製石器や石製ドリル、シャコガイ製貝斧、ヤコウガイ蓋製のスクレイパー、クモガイ製品、有孔サメ歯製品などが出土しています。そのためトゥグル浜遺跡は、今後、東南アジアとの文化的系譜や、与那国島を含む八重山諸島の石器時代の集団の社会と暮らしを検討していく上で重要な基礎資料となることが期待されております。

本展は、トゥグル浜遺跡で出土した遺物を公開することにより、地元のみなさまに郷土の歴史や文化に親しみを感じてもらうことを目的としておりますが、これを機会に与那国島さらには八重山地域における文化財の保存活用や歴史研究の機運が高まれば幸いです。

最後に、本展の開催にあたり多大なご協力をいただきました一般社団法人与那国フォーラムをはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

令和元年 11 月 15 日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　城田　久嗣

# 遺跡の概要

トゥグル浜遺跡は、与那国空港のなかの遺跡で、現在の滑走路部分を整備する際に確認されました。滑走路整備工事に伴う部分を昔の人々が生活していた層まで掘削を行うことになったため、発掘調査を行い遺跡の内容について図面作成や写真撮影を行いました。

調 査 年 度：昭和 58（1983）年 6 月 28 日～ 10 月 11 日
報告書刊行：昭和 60（1985）年 3 月

トゥグル浜遺跡遠景

## トゥグル浜遺跡の特徴１・・・土器が出土しない

貝の年代測定から約 3,800 年前の年代が求められていますが、土器が出土しないことが特徴です。

## トゥグル浜遺跡の特徴２・・・石製ドリルの出土

石製ドリルは下田原期（約 4,200 ～ 3,500 年前）の遺跡で多く出土します。この時期の遺跡からは土器も出土します。

## 遺跡の層序

Ⅰ層：現代の遺物＋トゥグル浜遺跡に関する遺物
Ⅱ層：トゥグル浜遺跡に関する遺物

## 遺構 ( 生活痕跡 ) について

発掘調査中に小穴跡は見つかったが、明確な遺構は確認できなかった。⇒後世の削平（さくへい）が大きいことも一つの原因

出土遺物

# 石器の種類

## 石斧

発掘調査により多く見つかりました。割れた破片まで含めると 309 点の出土があり、１個として数えることができるのは 177 点です。この数は、宮古・八重山諸島のなかではかなり多い点数になります。

ほとんどの石斧は、材料となる石材を固いもので敲(たた)いて形を整え、敲いた際に割れた部分はそのままにしているものが多いです。また、石斧の刃部は丁寧に磨かれています。

石斧は木材などにくくりつけて使用していたと考えられ、くくりつける際の抉(えぐ)りが残っている石斧もあります。

石斧と石製敲打器

有孔石器

## 石製敲打(こうだ)器・砥石・有孔石器

①石製の端部に何かを敲(たた)いた痕跡がある石器や、敲いた痕跡のほかスリ面を有する砥石として使用された石器が出土しています。

②有孔石器は表と裏の両面から孔(あな)が穿(うが)たれています。錘(おもり)として使用した可能性もありますが、用途は不明です。

## 石製ドリル

トゥグル浜遺跡では、７点の石製ドリルが出土しています。

石製ドリルは、他遺跡では下田原式土器と一緒に出土する傾向がありますが、トゥグル浜遺跡では下田原式土器の出土はありません。

石製ドリル

配置されたような石皿

大きな石器は決められた位置において、使用していたのかもしれません。

# 貝製品

## シャコガイ製貝斧

遺跡の表面から採集された製品です。シャコガイ左殻のちょうつがい部を利用して制作されています。自然面を利用している部分もありますが、打ち割りをすることによって丁寧に制作されています。また、刃部部分も丁寧に磨かれています。

## 貝匙（かいさじ）

巻貝の腹面や螺塔（らとう）部、軸を除去して制作されています。貝匙としては小型の製品で、一部では手に持っていたためか、角ばっていない部分もあります。

## クモガイ製品

遺跡の表面から採集された製品です。クモガイの角部分にあたる突端部が磨かれたように磨り減っており、ここを利用していたことがわかります。また腹面にも粗い孔（あな）が穿（うが）たれています。この孔は利用された痕跡がありませんが、このクモガイ製品を利用する際に孔をあける必要があったのでしょうか？

## ヤコウガイ蓋製スクレイパー

ヤコウガイの蓋の薄い縁辺部を打ち欠いて刃部を作り出した製品です。この製品はトゥグル浜遺跡で 446 点出土しており、奄美諸島や沖縄諸島、宮古・八重山諸島のなかで最も多く出土している遺跡です。

また、ヤコウガイの殻の部分に比べ蓋のほうが圧倒的に出土している点数が多いのも特徴です。この製品を使用する場所もしくは、製品の製作場所だった可能性があります。

クモガイ製品

ヤコウガイ蓋製スクレイパー

ヤコウガイ蓋製スクレイパー

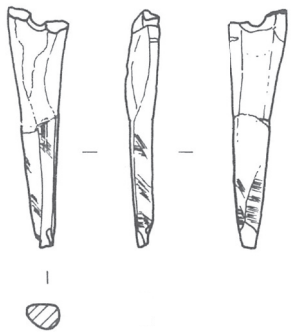
# 骨製品

## 骨針（こっしん）

発掘調査で２点出土しています。どちらの製品もイノシシ腓骨（ひこつ）を利用していると考えられます。

１点は針上部に孔があった痕跡があり、孔付近には刃物痕が残っています。

もう１点は細い棒状のもので、上部が破損しています。突端部には光沢があり、丸味があって鋭さはありません。使用頻度が高かったのかもしれません。



骨針

## 骨錐（こっすい）

骨錐と考えられる製品は３点出土しています。いずれの製品もイノシシの肢骨を利用したものが２点、肩甲骨を利用したものが１点出土しています。製品を整形する際の削り痕が残っています。

## 牙製品

イノシシの牙を利用した製品が出土しています。平坦面の広い側では中央部付近から先端部にかけて斜めに薄くなっていて、ちょうど小型ナイフのような形をしています。

## 用途不明加工品

イノシシの腓骨を利用した加工品が出土していますが、全体形状も不明な点が多いです。先端部が残っていることから、この部分を利用していた可能性があります。

エイの尾棘骨（びきょくこつ）部分を研磨した製品も出土しています。全体形は不明で用途も不明です。エイの尾棘骨の鋸（のこぎり）刃状部分を使用していた可能性が高いです。

## 有孔サメ歯製品

発掘調査では、６点の製品が出土しています。すべてイタチザメの歯を使用しています。サメ歯に孔があいていることもあり、ペンダント状の装飾品と考えられます。

宮古・八重山諸島内の遺跡では、サメ歯製品が出土することは非常に珍しいです。

有孔サメ歯製品

## 有孔椎骨（ついこつ）製品

エイやサメといった大型脊椎（せきつい）動物の椎骨の中心部に孔をあけた製品です。エイの椎骨製品が４点、サメの椎骨製品が５点の計９点出土しています。これらは、加工の痕跡が明確なものです。なかには、孔があいている椎骨もありますが加工かどうか不明なものもあるため、製品には含めていません。また、なかには火を受けた痕跡があるものもあります。

# 自然遺物

## 脊椎（せきつい）動物骨

自然遺物は多くの点数が出土しており、魚類を含めた海に生息する生物の骨としては、ハリセンボンやブダイなどが出土しています。これらは主に食用だったと考えられます。サメやエイも出土しており、これらは食用以外にも骨を製品化しています。ウミガメやイルカ、ジュゴンの骨も見られます。

陸上で生息する生物では、イノシシのほか、ハブ、ネズミ、コウモリが出土しています。とくにハブについては、与那国島に現生していないこともあり、昔の生息を考える上で重要です。

## 貝類

貝類はほとんどが食用だったと考えられますが、一部では貝製品として製作されています。また、トゥグル浜遺跡で特徴的なヤコウガイ蓋製品は、蓋に比べて身の部分の出土が少ないこともあります。

浅い海やサンゴ礁内で採れる貝類も多いことから、トゥグル浜遺跡で人々が生活していた時期は食料に恵まれた環境にあったと考えられます。

メモ欄

令和元年度　沖縄県立埋蔵文化財センター　企画展

移動展　与那国島の遺跡展

# トゥグル浜遺跡

発行日：令和元 (2019) 年 11 月 15 日

編集・発行：沖縄県立埋蔵文化財センター
〒 903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
お問い合わせ先　TEL 098-835-8752( 調査班 )

共催：DiDi 与那国交流館
〒 907-1801　沖縄県八重山郡与那国町字与那国 1107
TEL 0980-87-2166